

The Japan Times [グローバル時代の就活に役立つ情報紙]

The University Times

January 2012 Special Issue

理系
特集

CONTENTS

- | | |
|---|--|
| ■ Interview：インタビュー
小柴昌俊博士 ……①② | ■ Report：レポート
理系英語プレゼンテーションコンテスト ……② |
| ■ Researcher Interview：研究者インタビュー
企業の研究・開発者と英語力 ……③ | ■ Studying Abroad and Teaching Materials：留学と教材
留学で異文化交流スキルを身につけよう／理系学生のための英語参考書 ……④ |

Interview：インタビュー

理系学生こそ英語は必要です いろんなことを体験して 本当にやりたいことを見つけよう

公益財団法人平成基礎科学財団理事長
東京大学特別荣誉教授
小柴昌俊 博士

宇宙から地球に降り注ぐ素粒子「ニュートリノ」の観測で、2002年にノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊博士に、英語学習についての意見や自身の留学体験、学生へのメッセージを伺った。

——近年、理系学生の英語への苦手意識が指摘されたり、英語力向上の必要性が訴えられ、大学では英語学習環境を整える動きもあります。小柴先生は理系学生と英語力について、どのように思われますか。

本来、理系学生こそ、英語を必要とするものです。

というのも、第二次世界大戦の前までは、サイエンスについて語り合う言語といえば、まずはドイツ語でした。それが終戦後は、世界中の科学者が意志を疎通する言語のほとんどが、英語になりました。

ですから、たとえ、研究で何か新しい発見をして、いくら立派な論文を書いたとしても、それが日本語で、日本語の学術雑誌に発表したのでは、世界には認められるはずがありません。世界に認められる言語の最たるものが、英語であり、英語で論文を書いて、認められなければ、世界的にその人の仕事は認められないのです。また議論をするときにも、英語で相手にたちうちできなければ、意志の疎通ができないからです。だから、「理科」を本気でやろうと思ったら、英語を身につけることが絶対に欠かせないのです。

——それは、やがて大学などで研究者を目指す人はもちろん、企業に就職していく多くの学生にも当てはまりますね。

いまや、企業のほうも積極的に外国に出なければいけない時代になっていますから、そうなると一番通用するのは英語です。昨今のように、文系理系を問わず、企業が

新入社員に英語力を求めるのは当然のことでしょう。とくにサイエンスをやろうという人であれば、英語を無視するわけにはいかないでしょうね。

——いずれにしても英語を身につけておくことが求められるということですね。

ところが、誰にとっても、外国語を身につけることはやさしいことではありません。

私は、外国語を身につけるためには、10歳以前の子どもの頃から外国語を話す国へ行って、現地の子どもたちと一緒に遊びながら、自然に身につけるのが一番だと思っています。

私は英語でケンカもしますし、パーティーに出席すれば同席した人たちを笑わせる会話だってできます。しかし、日本人によくある「R」と「L」の区別が、話すことも、聞くことにおいてもいまだにできません。このような区別を日本人ができるようになるには、10歳以前にネイティブの人たちと一緒に過ごさないと、脳の中に、それを区別する回路ができないと思います。学ぶ時期が、ある年齢以上になってからは、その回路がつかれなくなってしまいうようですね。

幼い頃から学ぶという意味では、2011年度から小学校の外国語活動が必修科目になったことは、いいことだと思いますね。

——1953年にアメリカに留学されますが、それ以前の英語との接点はどのようなものだったのでしょうか。

私が初めて英語を勉強したのは戦争中で



す。旧制中学（現横須賀高校）に入学して、1年生のときには、学校にイギリス人の英会話の先生がいました。ところが、やがて戦争の影響でその先生は自国へ追い返され、その代わりに陸軍の将校がやってきて、「英語など勉強するな」というわけです。そんな時代でしたから、当時はまともな英語教育は受けられませんでしたね。

旧制一高（現東京大学）に入ってから、第一外国語は英語、第二外国語はドイツ語という学生生活を送りました。そのほか、モーパッサンの小説を読みたくて、フランス語を独学で勉強したりはしていましたね。

とはいえ、その頃はすでに日本は戦争に負けて、日本中が食べるのにも困っていましたが、私もアルバイトでほとんど学校に行かないという感じでしたから、しっかり勉強したとはいえません。

——では、留学当時は英語でご苦労された経験もあったのでしょうか。

東京大学大学院の2年のときにアメリカ・ニューヨーク州にあるロチェスター大学大学院に留学しましたが、当時の私は、英会話な

んでほとんどできませんでした。周りのアメリカ人となかなか話が通じませんでしたから、とにかく人と会うたびに、ゆっくり、はっきりと話してくれるように頼んで、なんとか過ごしていましたね。

それでも、そんなにすぐに身につくものではありません。渡米後の半年くらいは、それこそ神経衰弱になりそうなほどでした。ある日本食品店に、米を買いに行ったときには、先ほど話したように「R」と「L」の発音の区別ができませんから、「米（rice）を一袋くれ」といったら、店主が顔色を変えて、「そんなもの（lice＝シラミ）は売ってない！」と怒鳴られたこともありました（笑）。そんなふうには、いろいろ苦労はしましたよ。

当時は20代後半でしたが、どうしても英語を使わなければならない環境に身を置いて暮らしていると、それでもなんとか身につくものなんですよ。そうやって、私はまがりなりにも英語を身につけることができました。

日本にいたころから論文などは読んでいたから、大学での研究に関する専門的な英語には、かえってなじみがあったので、それほ

Interview and Report

インタビュー&レポート

ど苦労はしませんでした。

——いま、学生が留学することについて、先生はどんなご意見をお持ちでしょうか。

とてもいいことだと思います。語学力を身につけるだけでなく、できるだけ若いうちに日本以外の国にはいろんな人がいて、それぞれの生活をしていることを、身をもって体験することは、とてもためになることだと思います。

——最後に学生に向けてメッセージをお願いします。

学校の先生に「これをやりなさい」と言われたからやる、父親に「医者になりなさい」と言われたから医者を目指す……そんなふうに、人から言われたから取り組むのではなく

て、自分からいろんなことを物怖じしないで体験してほしいと思います。

そして、いろいろな体験をした中で、「僕はこれをやってみたい」「これなら私にもできそう」と本当に思えることに当たって、それに挑戦してほしいですね。そう感じたものだからこそ、困難な状況や壁にぶつかっても、やめようとは思わずに続けていけるからです。

つまり大切なことは、さまざまな体験を通して、自分の本当にやる気の起きることを見つけるということなんです。だから、とにかく物怖じしない。いろんなことを体験する。そのうちに、本当にやりたいことが見つかるかもしれません。そうしたらしめたものでしょう(笑)。



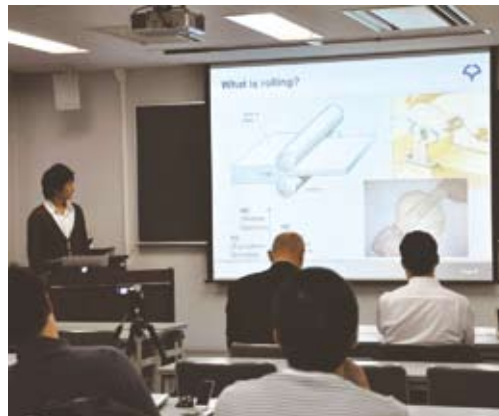
小柴昌俊

1926年生まれ、愛知県出身。第一高等学校を経て1951年に東京大学理学部物理学科を卒業後、大学院に進学。1953年、アメリカのロチェスター大学大学院に入学。1955年に修了。その後、シカゴ大学研究員、東京大学原子核研究所助教授を経て、1970年、東京大学理学部教授となる。1987年、退官。同年、東京大学名誉教授、東海大学理学部教授に。1997年、文化勲章授章。2005年より東京大学特別栄誉教授、2003年より財団法人平成基礎科学財団(2011年4月1日より公益財団法人平成基礎科学財団)理事長に就任。現在に至る。



理系英語 プレゼンテーションコンテスト 11月5日に大阪大で開催

研究内容についてプレゼンテーションを行う大学院生



グローバル化社会における理系英語

「最近博士前期課程在学中の学生でも、国際学会に参加するチャンスがあります。私が大学院生だった頃には考えられないことですが……」と話すのは、大阪大学工学研究科の藤田清士准教授。地球物理学が専門で、自身の研究には英語が欠かせないという。グローバル化社会と呼ばれる現代では、医学、数学、工学といった理系分野でも英語が必須であり、藤田先生は「私の研究分野では、日本語で学術発表したり、論文を出しても業績にならないこともあります」と言う。

理系学生に求められる英語力とは、英語で論文が読める、英語で論文が書ける、国際学会で口頭・ポスター発表ができる、そして学会でのディスカッションに英語で参加できる、この4点だと藤田先生は挙げる。ハードルが高いと感じる学生もいるかもしれないが、同じ分野の研究者なら、背景知識を共有するため、英語力があまり高なくてもなんとかやりとりができることが多いという。

院生の頃は、ひたすら英語の論文を読まされ、ひたすら英語で論文を書かされていたという藤田先生だが、「最近では科学者・エンジニア向けに、理系英語を効率的に学ぶことができる教材がたくさん市販されているので、学生はそれらを活用してほしい」と語った。

第1回「理系院生のための英語プレゼンテーションコンテスト」が11月5日(土)、大阪府豊中市の大阪大学豊中キャンパスで行われた。大阪大学、日本英語検定協会、ジャパントイムズの共催による、理系英語をテーマとしたユニークな取り組みだ。

理系分野では、特に大学院レベルでの研究を進める上で英語力が求められる。具



1位のトロフィーを受け取る村岡明(あきら)さん(23)



(左から)3位の和田洋輔さん(24)、1位の村岡さん、2位のト晩辰さん(23)

体的には論文を読んだり、書いたりすることや、国際学会に参加するための英語だ。工学部、理学部などの理系学部の学生は大勢が大学院に進学することもあり、昨今理系英語の重要性が叫ばれている。日本の国際競争力を高める上でも理系英語は必須ツールといえるだろう。

そんな中開催された今回の英語プレゼンテーションコンテストには、大阪大学の工学研究科から5名と理学研究科から1名の博士前期課程(修士課程)在学中の学生らが参加した。英語でそれぞれ15分間のプレゼンテーションを行い、自分の研究分野を紹介した。各自のプレゼンテーションが終わると、5分間の質疑応答があり、審査員の大阪大学工学研究科藤田清士准教授、ビジネススキルと英語のトレーニングを提供するアスパイアコミュニケーションズ代表取締役クラス・リーゼ氏、ジャパントイムズ記者マーク・デーヴィス氏からの質問に答えた。

プレゼンテーションの内容は、フッ化物結晶、半導体から、橋のメンテナンスの手法など、最新の研究結果をもとにしたもの。難しい内容だが、参加した学生らは、イラストやグラフなどを利用したスライドを使いながら、英語で分かりやすく説明をし

た。

審査の結果、1位は工学研究科マテリアル生産科学専攻の修士課程1年生、村岡明さん(23)に決まった。村岡さんは金属間化合物を加工する際の手法について発表した。

村岡さんは学部4年生の頃から英語の勉強に力を入れ始め、理系英語に関しては、普段の研究のために英語の論文を読むことで、専門用語のボキャブラリーを着実に増やしてきた。11月末には大阪で開催される国際学会で英語での発表を控えているという。

審査員のリーゼ氏は、全体講評の中で「スライドに頼らず、自分のプレゼンテーションを大切に。聞き手とアイコンタクトを取り、発表内容を理解しているか様子を見ながら進めましょう」とアドバイスをした。



大阪大学工学研究科藤田清士准教授



審査員(左から)藤田准教授、ジャパントイムズ記者マーク・デーヴィス氏、アスパイアコミュニケーションズ代表取締役クラス・リーゼ氏

Researcher Interview

研究者インタビュー

企業の研究・開発者と英語力

企業で活躍する先輩研究・開発者に英語との接点や必要性について聞いた。

オリジナリティのためにも英語の情報収集が不可欠

株式会社ヤクルト本社
中央研究所 研究管理部研究企画課課長
長南 治さん



Q 現在のお仕事を教えてください

以前は、食品開発研究部門でさまざまな研究を行っていましたが、現在は主に、当社にかかわりのある研究分野、特に乳酸菌や機能性食品を用いた研究動向の調査研究を担当しています。一般的な経営戦略に対する技術戦略、技術・研究分野に関する戦略立案、マネジメントといえるでしょうか。それによって、われわれが実施している研究が、世の中のレベルと比べてどの辺りにあるのかを分析し、今の方向性そのまま研究を進めるのがよいのか、中止するか、大学などほかの研究機関と共同で実施した方が大きな成果が得られるのか否か、といった検討を進めます。

Q 主にどういったケースで英語を使われるのですか？

当社が得意とするプロバイオティクスや腸内フローラといった研究は、今でこそ世界中で行われていますが、1990年代の初めまでは非常にマイナーな分野で、日本人の研究者による研究比率が高かったように思います。つまり調査研究も、日本の研究動向だけをウォッチしていればよかった。しかし現在、臨床研究に関する報告をもとに算出すると、この分野の研究比率は海外が約9割です。当然、英語で書かれた海外の資料や論文を調べない限り、その動向を把握することはできないのです。こうした状況ですから、海外の研究者との共同研究を行うことも珍しくありません。電子メールでのやり取りが中心ですが、時にはテレビ電話での会議も行いますし、年に数回は海外に向き、直接やり取りを行う機会もあります。メールや電話は便利ですが、細かいニュアンスなどを伝えるには難しさを感じます。やはり直接会って話すことが一番です。

Q 英語はどのように学ばれたのでしょうか

もともと私自身は英語が苦手な学生でした。ですが、当時は個人旅行用の格安航空券が出回り始めたばかりだったこともあり、長期の休みのたびに出かけるくらい海外旅行は大好きでした。英語学習に関しては、これまで英会話学校や通信教育講座などを試しましたが、やはり続けるにはそれなりの時間や覚悟が必要ですね。そんな中でも私が飽きずに続けられたのが、米国内のラジオ放送を聞くというトレーニングです。科学、カルチャー、政治・経済など番組の種類が豊富で、少ない語彙でゆっくりと話してくれるため、楽しみながら

学ぶことができました。

Q 研究者として、どんな時に英語の必要性を感じますか？

どんな研究分野、技術分野でも同じだと思うのですが、重要なのはオリジナリティです。自分が研究しようとするテーマを、すでにほかの誰かがやっていると意味がありません。それを知るには、文献や特許を調査する必要があります。知ることで、ライバルたちはどのようにアプローチし、ゴールを目指しているか、自分たちはそれらライバルより先にゴールにたどり着けるかといった解析ができるのです。現在はインターネットで瞬時に検索できますが、その情報の多くは英語で書かれています。ですので、英語ができなければ、その時点で勝敗は決まってしまう。今後、グローバル化の流れはますます加速するものと思われる。海外の研究者との共同研究も日常茶飯事になるでしょうから、英語を読む力、聞く力、話す力、場合によっては自分から発信する書く力も必要になってきますね。

Q 就職活動を行う理系学生にメッセージをお願いします

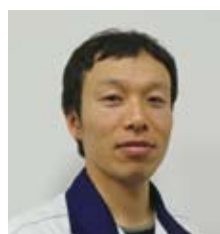
ぜひとも学生の間に海外に行かれることをおすすめします。これまで学んできた英語力の判断材料にもなるでしょうし、語学以外にも多くの学びがある機会だと思えます。就職活動にとって大切なことは視野を狭めずに、多くの可能性をポジティブに考えること。その意味でも一度でも日本以外の国を見ておくことは、仕事の視野をも広げてくれるはずです。それでも、自分に「向いている」仕事や会社を見つけるといことはすごく難しい。ですから、まずは自分の興味あることを大切にしてください。昔の人は「好きこそ物の上手なれ」と言いましたが、興味があることであればどんな仕事であれ、必ず一生懸命やります。一生懸命やればやるほど次にステップアップができる。仕事というものは、決して周りから与えられるものではなく、自分自身で切り開いていくもの。やり遂げれば次に必ずつながります。



東京都国立市にある中央研究所

英語学習の継続がもたらしてくれたチャンス

シチズン時計株式会社
技術開発本部 開発センター 時計開発部 システム開発課
松王 大輔さん



Q 現在のお仕事を教えてください

当社ではこれまで、光を電気エネルギーに変換し時計を駆動させる独自の光発電技術「エコ・ドライブ」や「電波時計」など、時計の歴史を変えるような革新的な技術や製品を生み出してきました。現在私は、次世代時計の1つとしてBluetoothを利用した時計の開発に携わっております。具体的には、今年登場した「Bluetooth Low Energy」という低消費電力の国際標準規格の規格策定に注力しています。Bluetooth機能を搭載した時計はすでに製品化されているのですが、従来のBluetoothの1/5の消費電力であるLow Energy規格が登場するという事で、時計とスマートフォンとの連携など、新たな可能性を広げようと試みています。

Q 主にどういったケースで英語を使われるのですか？

この次世代Bluetoothでのユースケースを広げるため、私はBluetoothの仕様を策定する団体である「Bluetooth SIG」のワーキンググループの1つに所属し、新たなBluetoothの規格策定に関わっております。このワーキンググループには、アメリカ、アジア、ヨーロッパなどの各国の企業が参加しており、その共通言語は英語。国も企業も別々だけど1つのチームとして動きます。3カ月に1度は直接会ってリアルな会議を行うのですが、そこで印象的だったのが外国人のコミュニケーション。決して上手ではありませんが、どんどんしゃべりかけてきます。彼らにとって英語は単なる道具なんですよ。仕事以外での世間話は正直苦手なのですが、得られる情報や学べることも多く、あえて自ら飛び込むよう心がけています。

Q 英語はどのように学ばれたのでしょうか

決して流暢に話せるわけではないのですが、IT先進国であるアメリカに憧れていたこともあり、もともと英語は好きでした。大学入学後から通い始めた英会話教室は現在も通い続けています。また、英語を学び続けられているのはインターネットの影響も大きいですね。私は学生時代、電子工学を専攻していたのですが、プログラムを組むなかでわからない部分があった時、何より参考になったのは英語の文献です。ネット上にはその文献に関する掲示板があって、英語で質問をすると海外の人が答えてくれる。ネット上のコミュニケーションではありましたが、自分の興味ある

分野でしたので、モチベーションを高く保ちながら、英語の上達ことができました。

Q 開発者として、どんな時に英語の必要性を感じますか？

最新の技術や装置の動向を追っていくと必ず英語にいきつきます。もちろん日本の装置や技術のレベルは水準以上ですから、英語ができなくても、日本語が理解できれば製品は作ることができます。しかし、もしかしたら海外製の方が性能は良いかもしれない。英語のスキルが低いばかりに、井の中の蛙で外を見ようとしなないのは非常に危険だということ、海外に出たことですごく実感しています。そういう意味では、理系の人はもう少し英語を頑張らないといけません。私自身への自戒も込めて。一方で若手の私が、世界各国の企業や開発者が参加するBluetooth SIGのワーキンググループに参加しているのも、周りに英語嫌いな人が多かったから(笑)。英語を続けてきたことが、このようなチャンスをもたらしてくれたと言えます。

Q 就職活動を行う理系学生にメッセージをお願いします

これからの時代、社会人として英語をまったく使わないなどということはありません。ぜひ時間のある学生のうちに英語を学んでください。今やFacebookなどのソーシャルメディアで世界の人たちとダイレクトにつながれるわけですから、英語を学ぶのはうってつけの環境です。私の場合はプログラミングでしたが、ご自身の興味がある分野で、海外の人とコミュニケーションを取ってみてください。刺激を受けるという意味では、外とつながるところに身を置いて勉強するのがベストです。たとえそれが、リアルではないネット上のやり取りだけでも、英語力が上達することは間違いありません。私が海外に行ってわかったのは、外国人は日本人のことをとても尊敬してくれるということ。英語が使えないことで、こうした人たちと出会えないなんていったらすごくもったいないですね。



東京都西東京市にあるシチズン時計本社

Studying Abroad and Teaching Materials

留学 & 教材

留学で異文化交流スキルを身につけよう

理系学生にとっても国際感覚を身につけることは大きな武器となる。グローバル時代の就活や企業人となってからも役立つ留学のすすめ。留学支援を行う毎日エデュケーション海外留学サポートセンターの関根俊輔さんに、最近の留学事情や留学のメリットを話してもらった。

——近年の大学生の留学には、どのような傾向が見られるのでしょうか。

今、日本の大学生の就職活動に影響を与えているものとして、「就職氷河期」と企業の「英語の公用語化」、「グローバル人材の育成」という3つのキーワードが挙げられると思います。就職を楽観視している学生はまずいない状況の中で、英語公用語化の流れやグローバル人材の育成ニーズを考えれば、英語が話せることで就職活動が有利に進むと考えるのは、当然のことでしょう。

そのため、以前は、もともと海外や英語に対するモチベーションの高い学生が1年間ほど長期間留学するというパターンが多かったのですが、最近では、少しでも英語力を伸ばしたいというニーズから、それほど英語に関心なかった学生でも、春夏の休みを利用した1〜2カ月の短期の語学留学を希望するというパターンが多くなっています。

全体的には国際関係の学部生をはじめ文系学生が大半ですが、最近では社会人の研究者や技術者の留学が増えてきていますから、理系学生も、時間のある学生時代のうちに一度留学を経験しておくことをおすすめします。

——短期の語学留学のおすすめのコース

やメリットについて教えてください。

留学といっても、選ぶ国や地域、英語学校も大学付属のものから民間企業のものでさまざま。また、レベルアップしたい程度などによりプランも多岐にわたります。私たちはお客様とのカウンセリングを通して、留学のお手伝いをしていますが、短期の語学留学でおすすめなのは「一般英語コース」といわれるプログラムです。

一般英語コースというと、物足りないと思う人もいるかもしれませんが、決してそんなことはありません。これは英語を学ぶだけではなく、さまざまな国の人々とのグループディスカッションなどを通して、日本人が特に苦手とする異文化交流のスキルを学ぶことができるというメリットがあります。

企業は英語力以外に、問題解決能力や異文化コミュニケーション能力を求める時代なので、理系の学生であっても留学で多少なりとも異文化交流に慣れておくことは、就職活動はもちろん、就職後にもプラスになるのではないのでしょうか。

一般英語コースの多くは、期間が1カ月から2カ月くらいなので、休学せずに、大学の休みを利用して行くことが可能です。もちろん、これで英語がペラペラに

なるというわけではありませんが、短期留学は、長期留学の準備としてはもちろん、世界を知るきっかけや、異文化の生活に慣れる最初のステップになります。

——さらにワンランク上の留学という、どのようなスタイルになるのでしょうか。

たとえば大学のエクステンションコース（留学生を対象とした英語で授業を行うコース）で、ビジネスなどについて学ぶのもいいのではないかと思いますね。理系だからといって、専門分野以外の知識や異文化交流スキルを身につけないと、今後は海外の人々と一緒に仕事ができなくなってくると思います。

ただし、このコースを受けるためには、かなり高い英語力の条件（英語能力テストの点数）が求められてきます。さらに3カ月くらいのコースの場合、日本の学生は休学しないと留学は難しいですから、1年間休学して留学した場合、最初の9カ月間で語学学校や大学の英語コースでしっかり英語を身につけ、残りの3カ月間をエクステンションコースでビジネスや自分の学びたいジャンルを学ぶといったパターンが多くなります。

——留学するまではどのくらいの時間が必要なのでしょうか。

理系学生こそ海外に出よう

ポイント

- ・ 今後は技術者でも異文化交流スキルが欠かせない
- ・ 英語力のみならず問題解決能力なども身につく
- ・ 就職活動でもアピールできる

留学までのステップ

- ① 評判の良い留学エージェントを探そう
- ② 4カ月前までにはカウンセリングを受けて、国や学校を決めよう
- ③ あとは英語学習など留学準備に集中!!
留学手続きはエージェントに任せて安心だ

留学する地域や国、期間などによってさまざまですが、とくに長期の場合などで学生ビザの申請等が必要になりますので、遅くとも4カ月前くらいまでにカウンセリングをして、留学先や学校などを決められれば、間に合いますね。短期の場合には、1カ月くらい前でも間に合うものもあります。

——留学する上での考え方でアドバイスがあれば教えてください。

英語能力テストでいい点数をとることが目的であれば、留学する必要はありません。日本の語学学校に通えば十分です。留学のメリットは、語学力をのばすだけでなく、海外での生活を体験したり、現地の人との人間関係をつくるためのスキルを学べるところにあるのです。まさにここが日本人の弱い部分でもあるので、今後の日本を担う理系の学生の方々には、留学を通じて語学力とたくましさをつけ、科学立国日本のさらなる繁栄に貢献できる人材になってもらいたいと思います。

毎日エデュケーション 海外留学サポートセンター
毎日留学ナビ <http://ryugaku.myedu.jp/>
東京カウンセリングルーム ☎0120-655-153

理系学生のための英語参考書

今から英語学習を強化したいという人にオススメの書籍を、4つのカテゴリー別に紹介。

1. 文法

「徹底例解ロイヤル英文法」

編著：綿貫陽他 3名
発行：旺文社
定価：1,800円（税別）



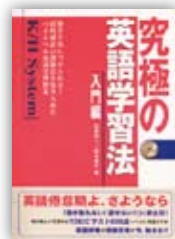
大学の理系学部で英語を教えてきた経験から、読解や英作文が苦手な学生は概して文法知識が身につけていないと言えます。文法をしっかりマスターすることが、結局は、すべての英語スキルを向上させる近道です。日ごろから小まめに文法解説書を調べる習慣をつけましょう。その点この本は、非常に広い範囲の文法項目をていねいに解説しており、これ1冊で学習者のほとんどすべての疑問が解決される優れたものです。内容の豊かさに比して驚くほど手頃な値段も魅力的です。

2. リスニング

「究極の英語学習法 K/H システム 入門編」

著者：国井信一、橋本敬子
発行：アルク
定価：2,500円（税別）

リスニングの勉強法は、特に文系・理系の区別がないでしょう。この本は、アメリカで同時通訳として活躍する著者が編み出した、リスニング勉強法を解説するもので、音をつかむ、意味をつかむ、音と意味を一体化する、という複数のステップを段階的に練習しながら上達へと導いてくれます。シャドーイングを一つの軸としていますので、スピーキング能力の向上も期待できます。一度読んで半年したら忘れていたという本と違い、自ら練習して確実に身につける、という骨のある独習本です。



3. ライティング（英作文）

「理系のための英語「キー構文」46」

著者：原田豊太郎
発行：講談社（ブルーバックス）
定価：1,060円（税別）

この著者はもともと技術系ですが、多数の英語論文の分析に基づくしっかりした英語文法・語法の解説に定評があり、技術英文の書き方に関する実践的な自習書を数多く出版しています。本書の最大の特徴は第1部で、名詞や動詞ではなく、「流体動力は高い出力が得られる」のように、助詞を軸とする日本語構文をキーとして、それぞれの英語構文への変換法を、実例とともに解説しています。第2部では、技術文に頻出する言い回しのさまざまな対応英語表現を紹介しています。



4. プレゼンテーション

「エンジニアのための英語プレゼンテーション超克服テキスト」

著者：平井通宏
発行：オーム社 定価：2,500円（税別）

ここ十数年の間に、英語プレゼンテーションに関する書籍が多数刊行されていますが、理論（ルールなど）・フレーズ集・サンプルプレゼンテーションの三拍子そろったものはなかなか見つかりません。また、ほとんどが、英語教師がビジネスパーソンが書いたもので、必ずしも技術系の現場のニーズに合っていない。そこで借越ながら、英語での技術プレゼンテーション経験豊富な筆者が実務ノウハウをふんだんに織り込んで著したのがこの本です。卒業後実社会ですぐ役立つ実用的な本といえます。



監修・文/平井通宏

有限会社平井ランゲージ・サービス取締役社長。東京大学工学部卒業後、1965年から2002年まで、日立製作所勤務。2003年より神奈川大学理学部特任教授などを経て、現在は、神奈川大学理学部非常勤講師、早稲田大学理工学術院非常勤講師、日本英語検定協会アドバイザーなども務める。著書に『速く正確に読むITエンジニアの英語』などがある。